

1983 年度学会賞受賞作品・授賞理由

◆論文賞「都市設計に関する一連の研究」

田村 明(法政大学法学部 教授)

〈選考理由〉

著者は15年間にわたって横浜市にあって都市整備の企画と行政の指導を担当し、横浜市が街づくりに多彩な活動を展開する上に大きな貢献を果たした。その経験にもとづいて著者は在職当時から多くの著書、論文を発表して来た。「宅地開発における開発指導要綱の成立過程とその基礎的都市環境整備への効果に関する総合的研究」(昭55)から都市づくりを体系的にとりまとめた「都市ヨコハマをつくる。実践的まちづくり手法」(昭58)に至るまで、執筆された動機によって学術論文、計画・設計論、計画行政論、啓蒙書など様々であるが、一貫して都市設計の志向を市街地の内外に展開し、その理論を体系化して都市行政の主題の一つとして位置づけた実績は市民、企業等広い層からの大きな関心の的となったのである。これらの著作活動の中、最近刊行された「都市ヨコハマをつくる」は小著であるが、著書の云わんとする全容を判り易くとりまとめている。すなわち著者は「土地利用の規制と誘導」つまりコントロール、「都市の骨核形成プロジェクト」および「人間的都市空間を創造するアーバンデザイン」とこれらを支える「都市科学確立へのリサーチ」と「組織」をもって都市づくりのシステムを提案している。すなわち、これら都市設計に関する理論と実際はすべて横浜市での宅地開発要綱、地下鉄と高速道路網計画、都市プロムナードなどの実績で裏打ちされているものであって、他都市においても適用できる考え方を持っている。

以上、氏の研究は今後の都市計画の発展に寄与する処大であると考えらる。

◆論文奨励賞「非集計行動モデルの交通需要予測への適用に関する研究」

大田 勝敏(東京大学工学部都市工学科 助教授)

原田 昇((財)計量計画研究所研究員)

《選考理由》

非集計行動モデルは、従来のゾーン単位を基本とした集計モデルに対して、交通行動の基本単位である個人を直接対象として、その行動をモデル化するもので、交通需要予測の分野で近年広く研究が進められつつあるテーマである。個人は利用できる選択技の中から、最も効用の高いものを選択するという経済学の効用理論的基礎をもつモデルである。また、この非集計行動モデルは価格、個人属性など、多くの変数を組み入れ得ることから、政策効果の分析に適していること、モデルの地域間転用性が高く少数サンプルでモデルが作成できること等多数の実用上のメリットがあるとされているが、その適用性は必ずしも明確ではなく交通計画への適用性を、実用段階へ高めるための研究が急務とされてきた。

本研究は、従来研究が進められてきた各種の非集計行動モデルの体系的整理を行って、それぞれの特質を明らかにすると共に、NL(Nested Logit)モデル等の新しい非集計行動モデルを鉄道駅・アクセス交通手段の選択行動に適用することによって実用性を示しこの分野における新たな展開の可能性を示しており、高く評価されるものである。

太田、原田両氏は数年来一貫してこの非集計行動モデルに関する研究の紹介、レビュー、解説にも多くの努力を傾けており、わが国におけるこの分野の研究の重要性について関心を高め、普及させた上で大きな先達性を発揮しており、今後の研究の発展の可能性も大きい。

以上により、論文奨励賞にふさわしいものであると考える。

◆論文奨励賞「鉄道駅における自転車駐車場の規模と配置の計画手法に関する研究」

渡辺 千賀恵(岐阜工業高等専門学校土木学科 助教授)

《選考理由》

わが国の自転車交通は近年増加の過程を経るなかで、量的にも質的にも都市における総合交通体系の一環として位置づけられつつある。1979年鉄道駅周辺の自転

車駐車場が都市計画事業として発足するに至り、自転車交通計画は都市計画の観点からも独自の領域として多くの自治体が取り組むべき焦眉の課題となっている。

本研究は、こうした現場的要請に対応するため、鉄道駅における自転車駐車場を対象に、その合理的で、実用性のある計画技術を体系づけようとしたものであり、渡辺氏がこの10年間取り組んできた研究を学位論文としてまとめたものである。研究内容は、まず第1に、自転車勢力圏といういわば計画対象区域の決定方法を検討し、ついで第2に、徒歩、自転車、バスの三者競合関係の分析にもとづいて駅勢力圏の内部構造を明らかにし、第3に各駐車場の個別誘致圏の区画式を吟味するとともに、第4に、駐車場容量の基礎となる自転車集中量の推定方法に言及している。

自転車駐車場は一面では全国的な社会問題でありながらも、実務的には各駅勢力圏内部の個別問題に帰着する属性をもつため、具体的、かつ直感的にも理解しやすい地理的構造を主眼におき、地図や簡便な現地調査などのみを前提とする本研究の計画手法は、(1)合理的根拠と、(2)実用性の両面を考慮した提案として高く評価できるものである。

以上により論文奨励賞にふさわしいと考える。

◆論文奨励賞「十九世紀前半のパリの中層・高密度市街地におけるその形態と開発主体に関する研究」

鈴木 隆(獨協大学外国語学部 講師)

〈選考理由〉

鈴木氏の研究はフランスにおいても、研究蓄積の乏しい19世紀前半のパリの市街地の形態と建設過程を考察した、都市計画史にかかわる研究である。

氏は、道路と細分化された敷地と中層共同利用建物の集積から成り、整然とした景観をもつパリの伝統的且つ一般的な市街地が、高密度な都市的居住形態の一つの完成された状態を示しているとの体験的認識に立って、その成立条件を実証的且つ多角的に解明して、都市および都市計画の一つの普遍的なあり方を探求することを目的として、本研究を展開している。その基本的問題設定および目的は、都市目標

像の設定が常に都市計画の基本的課題の一つであること、ならびに、現代の日本の市街地においては見ることのできない都市像が研究対象とされていることにおいて妥当であり且つ有意義であり、又パリの都市計画史研究においては、19世紀前半は、その前の18世紀後半の第一帝政期およびその後の第二帝政期に較べて、研究成果が少なく、本論文が19世紀前半に建設され、今日に至るまでパリの一般的市街地として機能している地区を分析対象として選んだことも、十分評価に値するものである。

本研究の成果として、個から出発して全体の成立に至る都市および都市計画のあり方の可能性とその一つの現実的且つ総合的なモデルが提示されている。その成果は、全体から出発して個に至る都市および都市計画のあり方が現に抱えている未解決の課題に、別の視点からの考察を加えるものとして、高く評価できる。

以上の理由から本研究は論文奨励賞にふさわしいと考える。

◆石川奨励賞「絵本にみる住宅と都市のつながりに関する研究・啓蒙」

延藤 安弘(京都大学工学部建築学科 助手)

〈選考理由〉

近年、わが国の都市計画・住宅問題においては、地域住民の住まい・町づくりへの主体的な参加が重視されているが、われわれ都市計画家として如何にこれに貢献しうるかについては、必ずしも明確ではなく、概してその必要性を説くにとどまるくらいがある。

氏は、かねてから専門家として市民と交わりつつ、ユニーク、且つ精力的な活動をつづけていて、この問題に関しても具体的研究をしている。

また、氏がまとめた著書のなかでも氏は、欧米のすぐれた住環境の背後には市民が自らの住まいと町を育て上げる「住文化」の伝統があり、その中で「絵本」が大きな役割りを果たしているのではないかという観点から、氏が自ら収集した欧米の各種絵本の内容を詳細に分析しながら、住み手が身のまわりの環境に関心をもつことの大切さと楽しさを強くアピールしている。

氏の研究の大きな特徴は、その着眼点のユニークさであり、しかもその未来への可能性の大きさである。すなわち絵本という新しいメディアに着目しまとめあげた著書「こんな家に住みたいな－絵本にみる住宅と都市」をとってみても、市民の都市教育・住教育という新しい研究分野と実践分野の可能性を示唆する。断鮮な問題提起をしており、また住まいと町づくりに関する、わが国独自の創作絵本への取り組みを促すうえで、大きな社会的インパクトとなるものと思われる。

以上から氏の研究は、きわめて独創的・啓蒙的であり、わが国都市計画の学問的成果と社会的基盤の進歩発展に資するところ大であると判断されるので石川奨励賞にふさわしいと考える。